



関西国際センター日本語教育シンポジウム
『ひろく・つなぐ・つくる
日本語教育の現場』報告

日本語研修にかかわる 人々が育んだ 関西国際センターの10年

うまだかずこ
上田和子 ● 国際交流基金関西国際センター、日本語教育専門員



大阪府泉南郡の
りんくうタウンに
ある国際センター

注 ● 1989年、埼玉県に日本語国際センターが開設された。

関西国際センターは、関西空港を対岸に臨むりんくうタウンに1997年に開設された国際交流基金二番目の日本語研修センターである(注)。

以来10余年、外交官・公務員、司書、研究者・大学院生ら専門分野を持つ成人を対象とした専門日本語研修と、海外で日本語を学ぶ大学生や高校生のための学習奨励研修を実施してきた。また、「初級からの日本語スピーチ」な



シンポジウム『ひろく・つなぐ・つくる 日本語教育の現場』のパネルディスカッションでは、『日本語でケアナビ』の開発を事例に討論が行なわれた

どの教材開発、年少者を対象とした試験サイト『すしテスト』、和英・英和辞書の機能を持ったインターネットサイト『日本語でケアナビ』など、多様な日本語教育支援事業も展開している。

これら関西国際センターの日本語事業では、センター内での学習と日本語の運用の場とのつながりを常に重視し、専門領域の関係者や地域コミュニティ

と連携を取り、ともに新しい「もの」や「価値」の創造を目指した実践を積み重ねてきている。

玄関前の桜並木のつぼみがふくらみ、やっと春の気配が感じられるようになった2008年3月8日快晴の土曜日、100名を超す参加者を迎えて、「関西国際センター日本語教育シンポジウム『ひろく・つなぐ・つくる 日本語教育の現場』」が開催された。

外国人ケア職従事者向けに
サイトの開発が始まった

『日本語でケアナビ』は、関西国際センターが開発・公開している和英・英和辞書機能を持つインターネットサイトである。07年7月の一般公開から約8カ月、世界約140カ国から45万件を超えるアクセス数を得ており、世界各地から多くの反響が寄せられている。パネルディスカッションでは、『日本語でケアナビ』の開発を事例に、ノンネイティブ(日本語が母国語でない)日本語教師、医療通訳・翻訳者、ウェブデザイナーらからプロジェクトの過程と協働での取り組みが語られた。筆者はパネラーの一人として、コンテンツ開発とさまざまな連携をプロジェクト運



→今回のシンポジウムでは、会場に設置したパソコンで『日本語でケアナビ』のデモンストレーションも行なった

←『日本語でケアナビ』のホームページ(nihongodecarenavi.jp)。日本語教育支援ツールで、看護・介護の場面で役立つ和英・英和辞書として、単語や表現を調べることができる



営の視点から報告した。

『日本語でケアナビ』開発の契機には、EPA（経済連携協定）に基づく外国人ケア職従事者受け入れの動きがあった。そこから、国内外の日本語教育支援の新たな取り組みとして、インターネット辞書機能を持つデータベースづくりが始まったのである。

開発スタッフがまず話し合ったのは、「外国人ケア職従事者の日本語教育支援のために、日本語教師は何ができるのか」ということだった。そして、「彼らがいっ、誰と、何のために日本語を使ってコミュニケーションする必要があるのか」といった具体的な運用

場面を描き、語彙を選定し、データを収集していった。

次第に、専門的分野における日本語支援とは、専門用語の導入だけではなく、その場での日常的なコミュニケーション力の育成が必要だということを確認するようになった。ただ、文脈への依存度が高く、刻々と変化する職場の日常に対応するための日本語は、決してシンプルではないこと、日本語教育支援が日本語教育だけでは完結できない現実も痛感しつつ、インターネットというメディアの利点を活かし、「使える日本語」を提供するためにはどうすればよいかなど、課題は多かった。

『日本語でケアナビ』は多くの関係者との協働で誕生した

このような状況下、プロジェクトを進めることができたのは、医療通訳・翻訳者、ウェブデザイナー、ノンネイティブ日本語教師、エンドユーザーなど、さまざまな領域の関係者との連携と協働があったからである。

ジョイ・デヴィラさんは、ノンネイティブ日本語教師の視点からフィリピン人学習者独特の日本語学習上の問題点や、フィリピン人の学習観、文化的背景へ

の視点を提供した。彼女は日本語教師として、プロジェクトへ深くかかわりながら貢献できたことを喜び、このような協働が実現されるためには、「お互いの"resonance"が大切だ」と強調した。『日本語でケアナビ』のデータ英訳は日本英語医療通訳協会によるが、会長である水野真木子さんは、「日常的な動作表現や痛みなどを表わす擬音語・擬態語、さらに幼児語など、場面に応じた表現を的確に翻訳するのは、プロの翻訳者にとっても一筋縄ではない。一口に翻訳といっても、現場特有の状況や生活に密着した表現は、背景にある文化への理解や体験が必要である」と強調していた。

ウェブデザインについてウェブデザイナーの角南北斗すみなみさんは、「デザイナー＝利用者がデータにたどりつくための道筋をつくること」と定義し、サイトを使いやすいもの、親しみやすいものとして提供するための工夫と試みを、「ウェブでの見せ方」を例に語った。このような工夫の背景には、「多彩な利用者を事前に制作側が制限する必要はなく、誰もが、どのページも利用しやすくすることが大切だ」という考えがあったという。



分科会1「地域にひらく」では、ふだんは互いの活動について話す機会がなかった者同士が集まり、グループワークが行なわれた

具体的状況にこだわって
つくられた『声かけ表現』

エンドユーザー代表は、すでにホームヘルパーとして活躍中の原田マリアフエさん。在日歴20年以上になる原田さんにとって、方言を含む話し言葉はほぼ問題ないが、仕事の引き継ぎ記録などの資料作成では苦労があるという。『日本語でケアナビ』はまだまだ使いこなせないが、『声かけ表現』は場面に応じて使えるので便利だ」と語った。東京女子大学准教授（現在は教授）の石井恵理子さんは、コメンテーターとして、『日本語でケアナビ』開発の、〈日本語運用の具体的状況から離れずに徹底的につくる〉という姿勢に感銘を受けた。これは、日本語教育全体を考えると心にも心に留めておくべきことである」と語った。その顕著な例として「声かけ表現」をあげ、「介護・看護のどういう場面で、誰が、どんな言葉を使うかという発想から表現を提示している点が重要である」と評価した。さらに「日本語を学習する努力はノンネイティブ側に求めがちだが、受け手であるネイティブ側はどのような努力をしているか、それが問われている」と締めくくった。

会場の参加者からは、「使う人を考えたデータベースづくりの大切さを認識した」「他分野との連携の様子がよく分かった」「日本語教育が変わっていかねばならない時期に入っていると感じた」「ノンネイティブ教師としての役割の重要性を実感した」「エンドユーザーをパネリストとして加えたのがよかった」という声がかかれた。分科会では参加者の活発な意見交換が行なわれた

大阪湾を臨む関西国際センターの食堂で開かれた懇親会をさきみ、午後には3つの分科会、①「地域にひらく」、②「専門領域とつなぐ」、③「インターネットをつくる」が行なわれた。

分科会1「地域にひらく」

関西国際センターの地元や他の地域で国際交流活動グループに所属する人、行政での国際交流担当者など、ふだんはお互いの活動について話す機会がない者同士34名がグループワークを行なった。

「交流経験のシェア」では、これまでの経験を振り返り、個人で解決できる

もの、研修生・学生の受け入れ先機関などとの交渉が必要なものの両方について話し合った。「交流活動の企画」では、「こんな外国人研修生が来たらどんな活動をするか」をグループで企画した。終了後のアンケートからは、「グループワークを通じて、交流のあり方など気づかされるが多かった」「企画する際の参考になった」などの声がかかれた。

分科会2「専門領域とつなぐ」

参加者44名のうちほぼ全員が日本語教育経験者で、実体験に基づく意見や



分科会2「専門領域とつなぐ」では、日本語教育経験者が出席し、事例報告について、ディスカッションが行なわれた



シンポジウムについての詳細
www.jpof.go.jp/j/kansai/sympo

日本語でケアナビ
nihongodecarenavi.jp

ブログ「こちら『日本語でケアナビ』開発室」
nihongodecarenavi.net/blog

質問が積極的に出された。事例報告では、介護、司書、ビジネスの分野から、「日本語教師が専門領域に踏み込み、ときには学習者に教えられ、ときには戸惑いながら専門家と協力したプロセス」が報告された。

ディスカッションでは、「学習者から専門家としての知恵を引き出すためには、教師も専門領域について知る必要がある」「海外の人材を受け入れるためには、現場の難解な日本語も変わらなければ」などの発言があった。日本語教師の役割、初級日本語の概念、また日本語教育のあり方も、現実に即して変わっていかねばならないという意識が醸成されつつあると感じた。

分科会3「インターネットでつくる」

インターネット利用について、23名の参加者のなかには、「ブログ発信」「学習者向け素材の公開」をしている人もいたが、ほとんどは「メールやウェブ閲覧程度」とのことだった。報告では、文章作成ソフトが扱えればできる簡単なサイト運営や、ブログによる自己成長などの実例が紹介された。

サイトのデモンストレーションや質疑応答では、ユーザー目線の質問から



分科会3「インターネットでつくる」では、サイト運営やブログの実例が紹介された

サイト運営にかかわる質問まで、幅広いやりとりが行なわれた。参加者からは、「ITはあまり得意ではないが、私でも何かつくることができるといいな」という気になった」などの感想が聞かれた。

関西国際センターにかかわる人が熱い思いを語り合った

シンポジウムを企画する段階で、「ぜひ、実践の現場に密着したものを」という声があった。それが関西国際センターらしいと考えたからである。この日一日、関西国際センターは日本語教育と専門領域や地域コミュニティと

の連携、ウェブサイト開発の悩みなど具体的な事例を共有する熱気あふれる場となっていた。プログラムを終えたあとも、センターのあちこちには、熱心に感想を語り合う人たちの姿があった。なお語りきれぬ思いを胸に帰途につく人のうしろ姿に、企画時の思いをかみしめた。

そして、改めて、関西国際センターには、日ごろ日本語研修のためにさまざまな人が往来していることを実感した。多くの人のつながりがセンターを形づくっている。その一方で、かわるどこの人の胸にも何かもたらされている。10年の歳月を経て、関西国際センターは人々の語り合いたい思いを寄せる場として育っていたのかもしれない。

センター開設当初、リソースとしての地域をどう学習者につなぐかと議論したことがあった。しかしシンポジウムを通じて、この場で行なわれてきたことは、すべて相互的なかかわりのなかで育み合ってきたものだという思いを新たにしたい。「ひらく」「つなぐ」「つくる」は関西国際センター10年の実践を物語る言葉であるとともに、今後を示す鍵でもあるという思いが沸々とわいている。☺